

安全確保など学ぶ

札幌建協 留萌トンネル見学会

【留萌】札幌建設業協会は7日、深川留萌自動車道留萌トンネルで現場見学会を開いた。会員17社の役員や技術者ら28人が参加し、炭鉱跡や住宅地に近接したトンネル工事での安全や環境に配慮した施工などを学んだ。

深川留萌自動車道495mのうち、留萌大和田ICと終点となる仮称・留萌ICを結ぶ4.1km区間に新設するトンネルで、2013年9月から岩田地崎建設がNATM工法で施工。延長は830mで、4日までに上半掘削566m、下半掘削56

3mを終えた。15年1月の貫通、同7月の覆工終了を目指している。

現地で副会長の宮永雅己土木委員長は「他社の現場を見学する機会はなかなかない。積極的に意見交換し、吸収してほしい」と呼び掛けた。留萌開建留萌開発事務所の斯

切羽から離れて安全に作業する装置を実演した



波俊二第2道路工務課長が概要、現場代理人を務める岩田地崎建設の伊藤篤さんが現場の特異性と対策をそれぞれ説いた。

炭層や旧坑道などが近く可燃性ガス発生の可能性があるため、30mごとに切り羽面3カ所でボーリングによる前方探査を実施。切り羽から坑口までの100m間隔でガス検知器を設置して24時間監視し、ガス検出時は回転灯と警報で知らせるほか、職員らに電子メールで配信する。入坑者にはICタグを着け、退避時に逃げ遅れがないか確認する。

また、民家が坑口から近いため、騒音や低周波対策として坑口と坑内に防音扉を設けたことも説明した。

札建協が現場見学会開催 技術力向上へ研鑽積む

留萌トンネルの安全対策視察

【留萌発】一般社団法人札幌建設業協会(岩田圭剛会長)は七日、留萌市内で土木委員会(宮永雅己委員長)による現場見学会を開催した。写真。対象現場は留萌開建発注の「深川留萌道留萌市留萌トンネル」(岩田地崎建設(株)施工)。宮永委員長をはじめとする、会員企業の担当者二十八人が参加。可燃性ガス対策などの安全管理体制を視察し、技術力の向上を図った。現場見学会は、会員の技術力向上や施工の工夫・改善に役立てることを目的に



毎年開催するもの。現場では、はじめに宮永委員長があいさつ。「積極的に質問するなどし、今後の取組に生かしてほしい」と呼びかけた。

留萌開建留萌発事務所の斯波俊二第二道路工務課長の事業概要説明のあと、岩田地崎建設の伊藤篤現場所長が、工事内容等について説明。トンネルの地質構造や可燃性ガス対策、騒音・振動対策、濁水処理の再利用などについて紹介した。

トンネル坑内に入った一行は、可燃性ガスの自動測定および自動警報システムなどを見学。そのほか、伊藤現場所長が延長約3.6キロの火薬装填器を紹介した。参加者は、盛んに質問するなどして研鑽を積んでいた。